The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

周顒による二諦の理解について

藤野泰二

はじめに

本稿は、吉蔵（五四九―六二三）に先行する人物で、しかも吉蔵の二諦説に影響があったと考えられる周顒の二諦説について考察することにより、吉蔵の二諦説の理解の一助とすることを目的とする。しかし、周顒が自己の思想について著したとされる『三宗論』はすでに失われており、吉蔵および三論宗の著作中にわずかに引用・関説がなされるのみである。

また、周顒についてはいくつかの先行研究がある。[1] 本稿では、諸先学の成果に基づきながら、周顒の二諦の理解はどのようなものであったのか、考察を加えてみたい。

一　周顒について

周顒の伝記は『南斉書』巻四十一列伝二十二にある。それによると、字は彦倫、汝南の安城の出身、広く百家に通じており、仏教の理解も優れていた人物であるとされる。宋の明帝に気に入れられ、親近宿直していたとある。その後、南斉の文恵太子の中軍録事参軍、太子僕兼著作、中書郎兼著作、国子博士兼著作などの役職に就く。妻帯者であったが、鍾山の西に小屋を建て、そこで独り質素な生活をしていた。

また、周顒は音韻に関する才能が高く、『四声切韻』を著したとされるが現存しない。現存するものとしては「抄成実論序」（『出三蔵記集』に収録）、道士張融との往復書簡（『弘明集』に収録）、何胤へ宛てた書簡（『南斉書』に収録）がある。

二　周顒の二諦説について

周顒が『三宗論』において述べている「三宗」とは、三種類に分類された二諦説のことであり、それぞれ不空仮名・空仮名・仮名空と名づけられている。これらの相互の関係については、『南斉書』巻四十一に次のように述べられている。

泛渉百家、長於佛理。著三宗論。立空假名、立不空假名。設不空假名難空假名、設空假名難不空假名。假名空難二宗、又立假名空。

印度學佛教學研究第五十八巻第一号　平成二十一年十二月

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

空仮名説は不空仮名説を批判し、不空仮名説は空仮名の説を批判するが、仮名空説は、その両方の説を共に破すのである。以下にこの「三宗」について、見ていくこととする。

二―一　吉蔵は不空仮名について『中観論疏』において「不空假名者經云。色空者此是空無性實。故言空耳。不空於假色也。以空無性實故名爲空。即眞諦。不空於假故名世諦。晩人名此爲鼠樓栗義。」（大正四二・二九中）と述べている。この説の特徴は、存在を成り立たせている自性については、その存在を否定するが、存在自体があることについては、必ずしも否定せず、空であるとはしないことである。このような説を名づけて「鼠嘍栗の二諦」という。鼠嘍栗とは、吉蔵が『二諦義』において「鼠嘍栗二諦者。經中明色色性空。彼云。色性空者。明色無定性。非色都無。如鼠嘍栗中肉盡栗猶有皮殼形容宛然。栗中無肉故言栗空。非都無栗故言栗空也。即空有併成有也。」（大正四五・八四上）と述べているように、鼠が栗の実の部分を食べ尽くし、中身はなくなって空になっているが、外の殼についてはそのまま残っている状態を指すものである。真諦として空を説くが、世諦としての有についてはその存在性を認めているのである。

この不空仮名（鼠嘍栗の二諦）説に対して吉蔵は「難云。論云。諸法後異故知。皆是無性。無性法亦無。一切法空故。即性無性一切皆空。豈但空性而不空假。」（大正四二・二九中）と批判している。また、この一文に続いて「此與前即色義不異也。」（大正四二・二九中）と述べていることから、この不空仮名説は、僧肇が破斥した即色義と同じ説であることがわかる。それは僧肇が長安で実際に触れていたと推測される(2)即色義のことで「明即色是空者此明色無自性。故言即色是空。不言即色是本性空也。」（大正四二・二九上）というものである。色の自性はないとは言いながらも、色については単純に存在性を認めており、空とはしていないのである。また、周顒は道士張融との間で往復された書簡の中で、次のように述べている。

夫有之爲有物知其有。無之爲無人識其無。老氏之署有題無無出斯域。是吾三宗鄙論。所謂取捨驅馳未有能越其度者也。佛教所以義奪情靈言詭聲律。蓋謂即色非有故擅絶於群家耳。（大正五二・四〇中―下）

ここで周顒は『老子』にも有・無についての議論があるが、それは仏教の説を超えるようなものではない。仏教は一般的な思考を超えた深淵な教えであって、「即色非有」を説く。それゆえに仏教はひときわ抜きん出たものとなる、と述べている。さきほどの即色義の引用において使われていた「即色是空」（＝即色是本性空）という立場に対して、周顒が自己の立場を表したものが「即色非有」なのである。

二―二　次に空仮名については『中観論疏』に「空假名者一

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

切諸法衆縁所成。是故有體。名爲世諦。折縁求之都不可得。名爲眞諦。晩人名之爲安苽二諦。苽沈爲眞。苽浮爲俗。」（大正四二・二九中）とあり、もろもろの存在というのは、さまざまな縁によって成り立っているものであり、このことを世諦とし、また、縁を細かく分析しても実体を得ることはできない、これを真諦とする。このような説を名づけて「案苽の二諦」という。この説は『大乗玄論』に「第二空假名。謂此世諦擧體不可得。若作假有觀。擧體世諦。作無觀之擧體是眞諦。如水中案爪手擧爪令體出。是世諦。手案爪令體沒是眞諦。」（大正四五・二四下）とあり、瓜を水面に浮かべたとき、水上の部分を世諦、水中の部分を真諦とする、というもので、分析を繰り返しても実体を得ることはできないように、水中の部分（真諦）を見ようとして、瓜を上げても見えるのは世諦であり、真諦を見ることはできない。また、瓜を完全に水中に入れてしまえば、それが真諦であるが、そのとき真諦は仮を通すことのないものとなってしまう。よって、吉蔵はこの説を批判して「難曰。前有假法然後空之還同縁會。故有推散即無之過也。」（大正四二・二九中）と述べ、縁会義と同じく推散即無の誤りがあるとする。縁会義的に理解すると、仮を壊すことによって真諦は得られることになってしまう。吉蔵は仮を壊すことなく真諦を得ることができると考えるのである。

また、周顒は張融への書簡で次のように述べている。

則老氏之神地悠悠。自悠悠於有外。釋家之精和坐廢。毎坐廢於色空。（大正五二・四〇下）

周顒は道家の精神が悠々としているのは有外によってであるが、仏教ではそうではなく色空の境地に到達しているからなのであると言う。また、張融が仏教を評した「以即色圖空」という言葉を「この言葉を超えるものはない」と言っている。

二―三　吉蔵は仮名空について『中観論疏』において「假名空者即周氏所用。大意云。假名宛然即是空也。」（大正四二・二九中）と述べ、仮名空説が周顒の自説であるとする。その内容を簡潔にいうと「仮名がそのまま空であること」（仮名宛然即是空）であるという。[3] また、これに続いて「尋周氏假名空原出僧肇不眞空論。論云。雖有而無。雖無而有。雖有而無所謂非有。雖無而有所謂非無。如此即非無物也。物非眞物也。物非眞物於何而物。肇公云。以物非眞物故是假物。假物故即是空。」（大正四二・二九中―下）と述べ、この仮名空説は僧肇の『不真空論』に由来しているという。吉蔵の引用する『不真空論』の一文に該当する箇所には、有は無に、無は有に依っており、物は無物とも真物とも言うことはできない、ということが説かれている。

つまり、仮名空説は不空仮名・空仮名の説のように有を肯定することもなければ、有とは別次元に真諦が存在するとも考えることがないものである。それが有に即しながらも有を

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

固定的に捉えることがなく（即色非有）、有に即しながら空を悟る（以即色圖空）ということである。また、周顒は、

知無知有吾許其道家。惟非有非無之一地。道言不及耳。非有非無三宗所蘊。（大正五二・四一上）

と述べ、道家は無を知り有を知ることについては優れているかもしれないが、非有非無の境地には及ばない。この非有非無の境地こそが『三宗論』の奥義なのだと言うのである。

小結

以上の考察をまとめると、不空仮名説は有に関し、それらが互いに依りながらあるとはしているが、有の存在を完全に否定したものではないものであった。空仮名説は有と空とが断絶しており、世諦と真諦との相補的な関係が説かれていない点において、仮名空説と決定的に異なり、それは同時に吉蔵にとって否定の対象となるものであった。周顒の自説である仮名空説は、有とは別次元に存在する実相を立てることをしない吉蔵の思想に合致したものであり、有を通して得られる実相を目指すものとして、吉蔵から僧肇の『不真空論』の論理に適った正統的な説であるとして認められていたのである。また、張融への書簡に見られた「即色非有」・「以即色圖空」・「非有非無」等の表現は、『三宗論』における「仮名空」と同様の意義を有すると考えられるのである。

1　周顒に関しては、平井俊榮『中国般若思想史研究―吉蔵と三論学派―』（春秋社、一九七六年）に詳細な研究がある他、三井淳辨「斉の隠士周顒三宗論」（『六條学報』第八八号、一九〇九年）、佐藤哲英「三論学派における約教二諦説の系譜―三論宗の相承論に関する疑問―」（『龍谷大学論集』第三八〇号、一九六六年）、古坂龍宏「三論学派に於ける相承問題」（『印度学仏教学研究』第一八巻第二号、一九七〇年）、同「「涅槃経集解」に見られる二諦義の研究」（『駒澤大学大学院仏教学研究会年報』第五号、一九七一年）、伊藤隆寿「南斉における三論と成実―周顒『抄成実論序』に関連して―」（『駒澤大学大学院仏教学研究会年報』第五号、一九七一年）、平井俊榮「三論教学の歴史的展開」（平井俊榮監修『三論教学の研究』春秋社、一九九〇年）、晴山俊英「即色義説再考」（『駒澤大学大学院仏教学研究会年報』第二三号、一九九〇年）、同「幻化義説と縁会義説」（『曹洞宗研究員研究紀要』第二二号、一九九一年）等を参照。

2　晴山俊英「即色義説再考」六九頁に「僧肇が接触したと考えられる（つまり関内に流行していたと想像される）即色義」とある。

3　『中観論疏』巻八末には「如假名色不可有不可無。四句求色不可得。故色即是實相也。（略）故知假名宛然而即是實相也。」（大正四二・一二六下）とある。

〈キーワード〉　周顒、『三宗論』、二諦、吉蔵

（立正大学大学院）

NII-Electronic Library Service